



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	武田泰淳の〈上海もの〉における敗戦と立ち退き
Author(s)	水溜, 真由美
Citation	国語国文研究, 154, 1-14
Issue Date	2020-03-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89714
Type	journal article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_154_01-14.pdf



武田泰淳の〈上海もの〉における敗戦と立ち退き

水 溜 真由美

一 はじめに

武田泰淳はアジア・太平洋戦争末期の一九四四年六月に上海に渡り、敗戦後の四六年二月まで上海に滞在した。帰国後、武田は〈上海もの〉と呼ばれる上海を舞台とする小説を多数発表している。〈上海もの〉の作品には、しばしば英米人から接収した洋館に暮らす武田を思わせる日本人男性が登場する。

武田自身も、敗戦直後までゼスフィールド公園（現中山公園）付近の洋館に暮らしていた。その洋館は日本軍占領下で収容所に入れられたイギリス人から接収した住宅だった。『対話 私はもう中国を語らない』（朝日新聞社、一九七三年）には、武田と堀田善衛との次のようなやりとりが記録されている。

武田（略）それで戦争のころ、兵隊から帰って来て、中日文化交

流協会というのが上海にあったね、そこへぼくは入ることになった。それは日本軍が上海を占領してからつくったもので、上海競馬場のあがりでまかなくていいね、それで宿舎とか、そういうものは、租界で外国人の使ってたあとを、無断で借りていたわけだ。

堀田 接収財産だな。

武田 接収という名目はいいいですけどね、無断で借りるわけだ。

（笑）それでぼくは一人でもって三階建ての家にはいつてね（略）。

（『対話 私はもう中国を語らない』、四五—四六頁、傍線引用者）

椎名麟三、武田泰淳、中村真一郎、野間宏、埴谷雄高、堀田善衛による座談会を収録した『わが文学、わが昭和史』（筑摩書房、一九七三年）では、「ぼくがもらった家は三階建て、ガレージがあつて、食堂が二つあるんだ（笑）。そこへおれひとり住んでいた。いかに悪いことをやっていたかということは明かなんだ」（一一七頁）という武田の発言がある。

ちなみに、戦中に武田が勤務した中日文化協会上海分会も、接収住宅に事務所をおいていた。この邸宅は「フェアリーランド」と呼ばれる広い庭園付きの三階建ての洋館でフランス租界の陝西南路にあった。堀田は、前掲『わが文学、わが昭和史』において、「ぼくなんか遊びに行く」と、広い芝生の庭があつて、プールがあるわけよ。そこで武田さんは芝生や馬の銅像を眺め、悠然とビールを飲んで何もしてないんだ（笑、朝行つてもね）（一一九頁）とユーモラスに回想している。趙夢雲によれば、この住宅は「競馬で財を成し、海運業にも手を染め、上海でも指折りの金持になった」、「英国籍ユダヤ人マラー」の邸宅であつたが、太平洋戦争勃発後に日本軍に占拠された。中日文化協会上海分会の事務所は三階におかれ、一階と二階には日華倶楽部が入つていた。^{*1}

しかし、日本が戦争に敗北するや状況は一変する。持ち主のイギリス人が収容所から戻り、武田は接収住宅から追われ、虹口の日僑集中地区への移転を余儀なくされた。武田にとつて、接収住宅からの追放は占領者から敗戦国民への転落を意味していた。

ところで、上海における敗戦体験は武田にとって文学の原点だった。堀田善衛との対談「現代について」（『文学界』一九五三年七月号）では「ぼくも実際上海でもつて、こんどの敗戦を迎えなければ、おそらく小説を書くとしても、書く意味をくつつけることができなかつたと思う。日本の小説に対してね」（『全集』別巻一、八頁）と発言している。武田にとつて上海での敗戦体験とは、一夜にして占領者から敗者あるいは戦争犯罪者への転落を余儀なくされる体験だった。さらには、敵国において敗戦国民となり、国家の後ろ盾を

失う亡国の体験（武田の言葉で言えば「滅亡」の体験）でもあつた。評論「ぼくと上海」（『日本読書新聞』一九五七年四月一五号）では、「敗戦ときまつてから、はじめて僕も、いくらか国際的な保証なき民の一人となることができた。自分を支え守つてくれるものが、すべて消え失せること。諸民族の間にもまれて、たつた一人で試されること。これほど貴重な体験はない」（『全集』一三卷、二四五頁）と回想している。

武田は評論「滅亡について」（『花』八号、一九四八年三月）において、上海における敗戦体験を有史以来人類が繰り返した「滅亡」の体験として捉え直している。敗戦直後の上海において、武田は連合国側の人々が勝利に沸く傍らで、「世界によって裁かれる罪人」になつたという鬱屈した気持ちに囚われていた。しかし、やがて「滅亡」という言葉が浮かび上がり、「おごれる英雄、さかえた国々、文化をはな咲かせた大都会が亡び、消え去つた歴史的現象を次から次へと想ひつかへた。そして、「滅亡は私たちだけの運命ではない、生存するすべてのものにある」ことに思い至つたという（『全集』一二卷、九二頁）。

このような視点は（上海もの）にも通底している。（上海もの）の多くは戦争末期から戦後まもない時期の上海を舞台として書かれているが、「敗戦後」を描いた全ての作品が、日本の敗戦により登場人物が危機的状況に陥る姿に強い関心を向けている。日本軍の将校や憲兵の戦犯への転落を扱った作品もある。

小説「獣の徽章」（『新潮』一九五〇年一〇月号）には、日本軍将校として上海に駐留し、米軍捕虜に対する死刑の判決文に署名にし

た廉で「戦犯」となり、死刑を求刑される倉という人物が登場する。倉はアメリカ人弁護士奔走により減刑となり、刑期を終えて日本に帰国する。倉はアメリカ人弁護士の助けがなければ処刑されていた可能性もあるにもかかわらず、権力者の交替が根本的な価値転換を生み、かつての「善人」が「極悪人」として断罪される状況を「いつの時代でも絶え間なくあった」普遍的な事実として受け入れていく。

本稿では、住居を追われる体験をこうした「滅亡」の思想の基盤にある敗戦体験の一つとして位置づけたい。戦争の敗者にとって住居を失うことは国を失うことと密接不可分であり、住居を失うことは国を失うことの換喩でもあり得た。^{*2}ただし武田は、親日派の中国人もまた日中戦争やアジア・太平洋戦争の「敗者」であることを忘れていなかった。〈上海もの〉には住居を追われる親日派の中国人の姿も描かれている。

本稿では、〈上海もの〉の中で「敗者」が住居を追われる姿がどのように描かれているのかという点に注目しながら、いくつかの作品を読み直したい。^{*3}その際、日本人と親日派の中国人の差異にも目を向けて、武田が両者にとつての敗戦体験の違いをどのように描いているのかを明らかにしたい。

二 占領と接収

武田の作品の分析を行う前に、上海における占領および終戦と住居の関係について概観しておきたい。そもそも、上海はアヘン戦争

で中国が英国に敗北した結果、開港された五港（広州・福州・廈門・寧波・上海）の一つであった。一八四二年の南京条約締結後の一八四五年、四八年、四九一年に、イギリス租界、アメリカ租界、フランス租界が相次いで設置され（一八六三年にイギリス租界とアメリカ租界は合併し共同租界となる）、西洋人、西洋資本の進出が進んだ。西洋人は、これらの租界地に西洋風の街を建設し、西洋風の住宅に住み、西洋風の生活を営んだ。西洋の商社、金融機関のビルが軒を並べる有名なバンド（外滩）の風景は西洋による支配の象徴だった。武田の自伝的小説「上海の蜃」（『海』一九七六年二月九月号）には、上海到着後、語り手の「私」が「東方文化協会」（モデルは中日文化協会）の事務所を訪ねるために街を彷徨う様子を描いた次のような件がある。

ヨーロッパ風の明るさ、ヨーロッパ風の色彩、ヨーロッパ風の街並みと人影が眼前に現れる。東京の銀座街とも、外人の多い横浜の街とも、それは異なっている。そこには、しっかりと白人の勢力がくいこんでいる。中国に渡ったはずの私は、もう一つ別の、異国の街に入りこんでいるらしい。瀟洒な商店街に並木が揃っている（『全集』一八巻、一〇七頁）。

もともと、武田が上海に渡った一九四四年六月には、上海は日本軍の占領下におかれていた。まずは、その前史を簡単に振り返る。^{*4}日本は日清戦争勝利後に上海における治外法権を獲得し、「租界関係国」の一つとなった。日本人居留民の数は日露戦争後に顕著に増

え始め、一九一五年にはイギリス人居留民を抜いて全外国人居留民中のトップになる。ただし、日本人居留民は一部のエリート層を除いて、旧アメリカ租界に当たる蘇州河の北側に位置する虹口に居住した。多くの居留民の住宅は「賃貸の中国式または中洋折衷式の小家屋」だった。一九三〇年代初めまで虹口には多数の中国人が居住していたが、一九三二年の第一次上海事変、一九三七年の第二次上海事変を経て駆逐され、虹口は急激に「日本化」し景観の上でも「日本町」となった。

第二次上海事変後、日本軍は上海を占領するが、租界は領域を縮小しつつ存続する^{*5}。しかし、一九四〇年の英米両軍の撤退と翌四一年のアジア・太平洋戦争の勃発により、租界における英米の覇権は失われる。開戦直後には日本軍が共同租界に進駐し、敵国の領事館の閉鎖、敵国人（領事館員・スパイなど）の除去、敵産の接収管理を行った。もともと、開戦後約一年間は「現状維持」政策が採用され、敵国人の扱いもそれほど過酷ではなかった。ところが、一九四三年一月以降状況が大きく転換する。汪兆銘政権の参戦を機に敵国人の集団生活所への収容が開始され、夏には共同租界、フランス租界が相次いで汪政権に返還された。中国の傀儡政権への租界の返還は、旧租界地における日本の支配の貫徹を意味した。

なお、日本軍による西洋人の住居の接収は、主として敵国人の収容の帰結であったと推測される^{*6}。その結果、一部の日本人居留民が棚ぼた的に接収住宅を手になることとなったわけであるが、虹口に集住していた日本人が「河向う」にある西洋風の閑静な住宅街へと進出したことは、占領者の交替を象徴する事態であった。

次に終戦後の状況を見たい。終戦時、上海には日本軍を除いて約五万人の日本人居留民が居住していたが、その後各地から約三万人が加わった。戦争に勝利した国民政府は湯恩伯を総司令官とする国民政府第三方面軍に敵産の接収を担当させた。第三方面軍は日僑管理処を設置し、日本人居留民を虹口の集中地区に移転させ保甲に編成して管理した。日本人の所有物資は、戦時賠償を目的として「旅行用具、日用必需品等」を除き全て接収する方針が採られた。内山完造の経営する内山書店も敗戦後まもなく接収された。

国民政府による敵産の接収には大きな混乱が伴った。堀田善衛は「警察や特務、軍などが何系統もあつて同じ財産を接収するから大混乱が起こる」として、接収の主体が一元化されていなかったことを指摘している^{*8}。また接収財産の私物化も横行していた。

武田は集中地区移転後に始めた代書業において、当局に提出する文書に「ある物をな」と書^{*9}くことがあつたと証言している^{*10}。おそらくその目的は、クライアントが住宅や財産の接収を免れるためであつたと思われる。他方で、堀田は「わが文学、わが昭和史」において、「接収ほど恐ろしいものはない。ある物をな」と書けば儲かるわけだからね。だからないことになったある物をめぐった物凄い闘争がある」、「ぼくの知ってる例では、ある工場を接収したのが南京政府の旧役人だったが、おれは重慶の代表であると称して接収した。ところが、また別に重慶から本当の国民党の役人が来た。そうになると、あんなこわいもんはないよ」と回想している（一四七頁）。本稿では詳しく論じないが、武田にとって代書業は、国家の後ろ盾を欠く状況でむき出しの権力に対峙する唯一無二の機会であつたと

思われる。

三 住居を追われる日本人

先述したように、〈上海もの〉には日本人のインテリ男性が西洋風の接収住宅に居住する設定の作品が多数存在する。まずは自伝的小説である「上海の螢」の設定を見ておきたい。語り手の「私」は、上海到着後まもなく勤務先の「東方文化協会」の理事であるO博士の家に下宿する。^{*11} O博士の家は「滬西の閑静な住宅街」にある三階建ての洋館である。「上海の英米人の住宅は、その頃すべて接収されて、日本人たちが自由に使用していた。博士も、G君も、理事長も、その接収した洋風家屋を借りうけて住んでいた」(『全集』一八巻、一一七—一一八頁)とあるように、O博士の家も接収住宅である。^{*12} ただし、後に「私」は東亜同文書院の管理下にある三階建ての洋館に引っ越すことになる。この洋館も収容所に入れられたイギリス人から接収した住宅であった。

実際に武田は、上海到着後まもない一九四四年六月から一二月末まで、O博士のモデルである小竹文夫の家に下宿した後、一二月末に別の接収住宅(「福世花園十九号」)に転居した。^{*13} 冒頭で触れた接収住宅はこの「福世花園十九号」のことであり、後述の「F花園十九号」や「才女」(『隨筆中国』二号、発行年月未詳)の舞台となる住宅のモデルとなった。

ところで、「上海の螢」は武田の死により「敗戦前」で断絶しており、「私」が接収住宅から追われる顛末は描かれていないが、「F花

園十九号」には日本人の立ち退きの経緯が詳しく描かれている。

「F花園十九号」は、敗戦後の一九四五年九月一〇日から翌日までの出来事を描いた作品である。主人公は敗戦まで南京路に店を持っていた美術商の丘であり、夫のある冬子という女性と愛人関係にある。F花園とは主人公が居住する地区の名称であり、武田が居住していた福世花園をモデルにしている。作中において、「F花園は行儀のわるい日本人の手に接収されるまでは、芝生や糸杉の緑の美しい子供の遊び場、手頃なテニスコートと風とおしのよい散歩道路を持ち、気のきいたフランス風と、明朗なアメリカ風、それに堅実な英国風を加味して、清潔と快適を誇る一流の住宅区であった」(『全集』三巻、二〇五頁)と描写されている。

物語はドイツ系ユダヤ人の弁護士が丘の住む接収住宅を訪れる場面から始まる。接収住宅の所有者は「キャンプから釈放されたばかりの英米人」であり、弁護士の来訪の目的は住宅の回復にあった。弁護士は、丘に所有者からの委任状と備え付けの家具什器の目録を示し、部屋の中を検分する。弁護士は、三階に下宿する中国人女性(後述)が立ち退きに応ずるか心配する。

同じ地区(F花園)に住む日本人医師桜井も丘と似た状況にある。桜井は、「あんたのところには外国人が来ませんか。わたしのところには毎日のように来よって、出てけ出てけとうるさくてかなわんですね」、「わしとは五人づれでやって来て毎日怒鳴りたてるです。かなわんですね」と連日のように立ち退きの催促を受けていることをこぼす(同、二二七頁)。

ところで、弁護士が来訪する直前に丘の家に下宿する中国人女性

の謝が何者かに殺害される事件が起こるが、後に犯人は謝の恋人の呉であることが判明する。戦争中に日本側機関に務めていた謝は、漢奸として「ひきまわし」になって銃殺、運がよくても暗殺される」ことを予期しつつ、「賭金を全部、日本に張った」つけを支払うことを覚悟していた（同、二三六頁）。他方で、謝は共産党が内戦に勝利することを確信し、恋人の呉が共産党の工作員となるようお膳立てすることを申し出る。その理由を呉に問われた謝は次のように答える。

「それはわたし執念ぶかいからよ」どうしてもわたしのかかりにあんたを生かしておきたいからよ。わたしだって生きていたいさ」と女は取乱すまいと肩先をブルブルふるわせながら言った。表面の冷静を裏切つて男の掌の中で女の指は興奮によじれた。「それが駄目だから、あなたを……」（同、二三七頁）

なお、呉が謝を殺した理由は明確にされていない。漢奸の運命を受け入れる謝の強い覚悟を知り、漢奸としての辱めを受けて殺されるよりは愛する自分の手で殺そうとしたことなのだろうか。そうであるならば、呉による謝の殺害は代行された自殺と見ることもできる。

さて、丘は、洋館に残された謝の屍から逃れるために、急遽恋人の冬子と共に（冬子の夫は徐州に留まっていた）、集中地区内の日本人専用ホテルに引越すことを決める。身元を示す文書類を処分した上で集中地区に逃げ込んでしまえば、謝の屍の関係者とみなされ

る危険が減ると考えたためだ。

居留民は十ばひとからげ、居すわりを拒絶された居候である。集中地区にゴチャまぜに投入されれば、腕章を巻いた野ら犬の群にすぎぬ。（同、二六一頁）

以下では、丘の立ち退きの経緯を描いた最終節（「四 脱走」）を検討したい。翌朝、丘の家に二台の大車が到着する。車夫たちが「軽すぎる荷物を悠々と担ぎ下し」て車に積み込んだ後、大車は冬子のアパートに向かう。冬子の引越しが終わった後、貴重品の入った三つのトランクを持った桜井が現れ、丘にトランクの保管を依頼する。桜井は移転先までトランクを見張るために強引に大車に同乗する。

その後、大車は集中地区に向かうが、テキストは移動する丘の視線で上海の街の様子を描き出す。「重々しい構えの店舗」を目にした丘は、接収された自身の美術商品店のことを想起する。店にあった骨董品は店主の兄から引き継いだ商品であり、丘の所有物であったはずだが、「彼」丘——引用者注」が売ったのでも、手離したのでもない」にもかかわらず、接収され、すでに丘とは無関係になっている。丘は失われた骨董品のことを考えながら「所有する」ことの意味について思いを巡らす。

やがてバンドが近づいてくる。丘と桜井は浮浪者の襲撃を警戒し、ガーデンブリッジを渡らずに「河岸の一つ手前の路筋を取る」ことにする。ところが、橋を渡る手前で大車の速力が鈍り、待ち伏

せていた浮浪児たちの襲撃を受ける。三人は抵抗するが、桜井はトランクを奪われ、冬子は「支那靴」を脱がされそうになる。丘は「闘争せねばならぬ」という思いにかられて地上に飛び降り、少年たちともみ合いになる。冬子が紙幣を少年たちの頭上に撒いた後に大車は動き出す。

このように、最終節が描き出すのは「敗者」となった日本人の都落ちの光景にはかならない。高級住宅街の接収住宅を後にして、豊と薪を山のように積んだ二台の大車に乗って虹口にある集中地区に向かう姿は惨めで屈辱的と言えよう。丘らが目にする全ての場所が、つい最近まで日本が占領していた場所であること、丘らに視線を向ける市民がこれまで日本の占領下におかれていた被占領者であることを考慮すれば、なおのことである。

他方で、作中では市民の視線が日本人である丘らに対して寛大であることが強調される。^{*15}浮浪児たちによる大車の襲撃も「家を喪つた犬」による「不慣れな商売」にすぎず、「集団的復讐の気配」はない。冬子の靴を脱がせようとした浮浪児は「愚鈍そう」な「小学三年ぐらいの男の子」で、その仕業は悪ふざけの域を出ない。丘は「所有物を強奪される」ことを「堪えがたい屈辱」と感じるものの、「小盗児」との小競り合いを「喜劇」と見なし、闘争心をむき出しにする自身の振る舞いを自問する。宙を舞う紙幣が浮浪児との諍いに終止符を打つ様子には祝祭的な雰囲気もある。

同時に、テキストは混沌とした上海の状況に注意を向けている。市民は勝者の徴であるはずの青天白日旗を出したり引つ込めたりしているが、その理由は「日本軍の与えた恐怖から、まだ抜け出せな

い」から、というばかりではない。

永いこと浸蝕され、占領された半植民地的都市の、抜け目の無さと気永さもあった。充血もせず痙攣もしない、象の皮のようなもので、商業都市は蔽われていた。市民は鈍感ではない。むしろ、焦燥していた。象皮のうらには、営利上の計算が、毛細血管の網の目をなして、脈打っている。街の血液は、かつての権力者を敬遠し無視して、ドクドクと日常の循環を続けていた。居留民は、その冷静な循環に混入した、營養にならぬ雑物であった。市民の寛大は、慈善でも同情でもない。機械的な血行速度の、物理的な正確さのためである（同、二七〇―二七一頁）。

ここに描かれるのは、持続的な経済活動に身を委ねながら占領者の交替を当然のように受け入れる上海市民の冷静さ、したたかさである。それは長年の占領の経験によつて培われた気質である。そしてそうした冷静さ、したたかさは、丘の住んでいた接収住宅の守衛にも共有されている。守衛は「権力者の交替」を歓迎するが、それは日本人を憎悪するためではなく、金儲けの機会であるからにすぎない。守衛にとって、F花園は「獲物の多い漁場であり、賭銭の要らぬ安全な賭場である」（同、二五九頁）。丘の引越しの最中に、守衛は便衣の男たちを連れ込み家具什器類の売買の仲介をしようとする。丘は「一身の安全保証のため」、住宅の所有者のものである絨毯を売ることを思い止まる。

最後に、最終節のタイトルが「追放」ではなく「脱走」であるこ

とに注意を向けておきたい。丘が「脱走」を試みるのは謝の屍からである。丘は集中地区に逃げ込めば、屍との関係を断ち切ることができる¹⁶と考えている。先述したように、謝は漢奸として殺されることを覚悟しつつ呉によって殺される。ところで、大日本帝国こそが漢奸を生んだ元凶であると考えらるならば、日本人である丘にとつて、謝の屍から逃れることは漢奸を生んだ責任から逃れることを意味する。作中には、「いずれにしても人殺しは良くない。それに関係するのは御免ですな」と言い放つ丘に対して、呉が「南京虐殺で何千何万人の中国民衆が日本兵に殺されたか御存知ですか。あの虐殺にはあなたも無関係ではあり得ませんよ。局外者ではないですよ」（同、一二六頁）と言いつ返す場面がある。呉によるこの発言は、丘が謝の殺害と無関係ではないということをほめかすものである。

このように、住居からの立ち退きと重ね合わされた「脱走」のモチーフに、戦争責任に頬被りする日本人の立ち退き¹⁸引き揚げに対する武田の批判を読み取ることは困難ではない。実際に、多くの日本人が占領地を離れて集中地区に赴き、最終的に日本に帰国することによって中国における戦争責任を回避した（日本人居留民の戦争責任には、上海事変の際の中国人に対する暴虐行為も含まれる¹⁹）。本作品は、日本人の立ち退き¹⁸引き揚げが、犯人が犯行現場から立ち去るのと同様の「脱走」の意味を持つものであったことを鋭くあぶり出している。

四 住居を追われる中国人

武田の〈上海もの〉には住居を追われる中国人も描かれる。以下ではまず、「上海の螢」¹⁹、「F花園十九号」²⁰、「才女」に登場する中国女性に注目したい。これらの女性はいずれの作品においても主人公の日本人男性の接収住宅に下宿する設定であり、モデルは共通している。武田は、竹内実との対談「戦争と中国と文学と」（『波』一九七四年三月号）において、「才女」というのは日本側についていた中国女性で、僕の居た家に下宿させていたんですが、戦争が終った時に、これからは武田さんたちの世の中だと言いました。（略）その人が「才女」の主人公であると同時に「F花園十九号」ではその人が殺されるという設定で書いてあるんです」（『全集』別巻二、二二六頁）と証言している。

「上海の螢」では、同じ女性が夏女士（夏小姐）として登場する。夏は、日本語が堪能で頭の良い「年増の女性」であり「東方文化協会」における「私」の同僚である。夏には胡という名の年下の恋人がいる。先述のとおり、「私」はO博士の家から出て別の接収住宅に引っ越すが、O博士の依頼で三階の一部屋を夏に貸すことになる。

なお、「上海の螢」は「敗戦後」を描いていないため、夏が住居を追われる経緯は描かれていない。ただし、ある夜「私」は奇妙な夢を見る。夏が何者かの手で殺され、屍体が宙に浮いたままになっている。よく見ると、夏の屍体は無数の螢が密集して出来た黒檀のような寝台によって支えられている。しかも、屍体は螢に占拠され食

い殺されている。松本陽子はこの夢を、漢奸と漢奸を処罰する側に立つ中国人群衆のイメージに重ね合わせている。^{*20}

次に「才女」を見たい。「才女」において主人公の杉はキャンプに入れられた英人K氏の洋館に暮らしている。杉の住む洋館に下宿する中国人女性性は「三十すぎた独身女」の周である。周は杉が「どうてい及びがたい」と思うような才能豊かな女性で、とりわけ社交の才能に秀でていた。周は「会社の秘書を二つも三つも兼任し、杉の数倍も月給を取」っており、周は恋人の黄にも米穀統制会の就職口を斡旋する。

ところで杉の住むF花園は閑静な「洋風の住宅区」であり、「汪政府系の要人や商人など日本憲兵の手を借りたり、敵産委員会へ金をつかったりして」、「家を見つけようとたくらむ者」が後を絶たなかった（『全集』一卷、一二二頁）。戦争末期、F花園に日本の特務関係の仕事をする呉一家が引越してくる。呉の妻は有名な金持ちであり、周は呉の家に入り浸るようになる。ところが、まもなく戦争が終わり、戦時中に日本関係の会社に勤め日本人の有力者とのみ交際していた周は苦境に陥る。特に深刻だったのは住宅の問題である。杉はすでにキャンプから出たK氏の来訪を何度か受けており、近く集中地区への引越しを予定していた。周は杉の立ち退き後も家に住み続けられるようK氏と交渉するが、周に与えられた猶予はたった一週間であった。

次に「F花園十九号」を見たい。前節で説明したとおり、丘の家には謝が下宿していた。謝は日本側機関で働く三〇歳のやり手の独身女性であるが、先述したように、漢奸として殺されることを予期

しながら愛人の呉によって殺害された。

これまで見てきたように、「上海の螢」、「才女」、「F花園十九号」に描かれる中国人女性性は、いずれも日本側機関に勤務する親日派であり、日本の敗戦によって漢奸として指弾される立場にある。「才女」の周が敗戦後に苦境に陥った理由も、彼女が親日派であったことによる。

「F花園十九号」には謝のおかれた状況を次のように描く場面がある。

日本の降服が発表された日から、謝は絶望に包まれたはずである。丘にはどうやら帰るべき故国があるが、その瞬間から彼女は自分の祖国の裏切者として、公然と五尺の身体を置く場所がないのである。変名して別人になるか、別箇の地帯へ遁入するか、決死の思案は日夜、彼女をなやましているはずであった（『全集』三卷、二一六頁、傍線引用者）。

こうした絶望的な状況と恋人の呉の訪問が途絶えた寂しさを紛らわすためか、謝は丘と肉体関係を持つ。丘は冷酷な感情を抱きながら謝の求めに応じる。

謝の場合、保持しているのが享楽の念であるにせよ、腹黒い企みであるにせよ肉体の関係にあとくされがない。どうせ一箇月とはつづくまい。それに丘は安心をおぼえた。

「この女はつかまれば死刑になる。絞首か銃殺か、それとももっ

と大衆の満足する方法で……」

逮捕や処刑におびやかされていない一市井人の満足感が、天井から釣り下げられた純白円型な傘をかぶった伝統の光りで一部分金髪のようにかがやく女の髪の毛の匂いをかきながら、丘の胸にこみあげる。(略)

「まさか恋愛じゃないでしょうな」取引で勝ちみのある商人らしく、おちついて丘はたずねた。死刑直前の犯罪女の健康な肉身は、彼の情慾を異常にそそった。やがてはこわばる漢奸女の乳房や脚がこのようにして自分の自由になろうとは、世界中誰一人として気づく者はあるまい。これこそ秘密の、永久に秘密の快樂というものだ。(同、一二七頁)

丘の謝に対する考えはミソジニックかつサディスティックであるが、その背後には親日派の中国人に対する日本人ゆえの優越感が潜んでいる。もちろん、丘自身が接収住宅に暮らす戦争協力者であったこと、そもそも日本こそが親日派の悲劇を生み出した元凶であることを考慮するならば、丘が謝に対して優越感を抱くのは理不尽である。とはいえ、終戦後の中国では、親日派の中国人が日本人以上に困難な状況におかれる場合が少なくなかった。漢奸として裁かれる寸前にあった李香蘭が、日本国籍を証明し山口淑子に戻ることでつて処刑を免れ帰国を許されたことなども、戦争協力者であった日本人と親日派の中国人の大きな運命の開きを物語る。

堀田善衛「漢奸」(『文学界』一九五一年九月号)には、その背景を直截に述べた次のような一節がある。

日本の降伏は、それまでたとえ名目上だけでも協力関係にあった日本と南京偽政府とを、決定的に別のものにしてしまった。日本の敗北は同時に南京偽政府の敗北であった筈である。ところが敗れたものは日本だけであった。南京偽政府は、敗北以上、であつた。それは、無くなったのである。政府は「解散」したのである。人民を支配する政府が無くなったとすれば、その政府を構成した要員も、無くならねばならぬ。^{*21}

つまり、敗北した日本人には帰るべき祖国があつたが、「南京偽政府」の支持者には帰るべき祖国はなかった。この差異は、敗戦後の日本人と親日派の中国人の住居をめぐる状況の差異にも連動している。敗戦後の日本人は接収住宅から立ち退くことを強いられ、集中地区には居場所があり、時期が来れば帰国することが可能だった。他方の中国人は一切の居場所を奪われ、謝が危惧したように、抹殺さえされかねない状況におかれた。漢奸としての裁きを免れるために亡命する者もいた。冒頭で言及した「獣の徽章」には、戦争中对日協力を行った王という中国人が登場するが、戦後に漢奸の烙印を押された王は日本に逃亡し日本人を装って生活している。戦犯として刑期を終えた後に帰国した倉から王の状況を伝え聞いた視点人物の一色は、「漢奸」という言葉に「戦犯」よりも「はるかにどぎつい色彩と堪えがたい臭気」を感じとる(『全集』三巻、一一六頁)。

武田と同じように戦中に国策文化機関に勤めた堀田善衛は、中国人の文化人を対日協力させ戦後に困難な立場に陥れたことに関して随所で罪責感を表明しており、先述の「漢奸」もそのような観点か

ら書かれている。武田もまた、親日派の文化人が戦後に「漢奸」として指弾されたことに対して罪責感を感じていたと思われる。何よりも中日文化協会における武田の同僚には多くの中国人がおり、その中には陶晶孫など著名な文化人も含まれていた。^{*22}「上海の螢」に登場するT氏のモデルでもある陶晶孫は一九二〇年代に創造社に参加した作家で、同じく創造社に参加し共産主義陣営で抗日運動を戦った郭沫若の義理の弟でもあった。武田は一九四四年に南京で開催された第三回大東亜文学者会議にも参加しており、親日派の文化人がおかれた困難な状況とその苦しい胸中を十二分に察していたと思われる。戦後まもなく発表された「中国の作家たち」(『人間』一九四六年六月号)には、戦中に「日本に接近した」ために戦後「痛ましい試練」に遭遇している柳雨生、陶亢德、周作人、蘇青、張愛玲、陶晶孫らへの思いやりに満ちた言葉が書き留められている。

五 おわりに

本稿では、戦中に接収住宅に住み敗戦後に住宅を追われた体験が武田の滅亡の思想の基盤にあるという仮説に依拠しながら、武田の〈上海もの〉が住居を追われる人々をどのように描いているのかを検討した。〈上海もの〉の多くの作品が、日本人および親日派の中国人の占領者から敗者への運命の転換に強い関心を向けているが、生活の基盤であるところの住居の剥奪はその核になる出来事だった。

中でも、豪華な接収住宅からの立ち退きは、占領者から敗者への転落を象徴する出来事だった。「F花園十九号」において、主人公の

丘らが滬西の高級住宅街から虹口の日僑集中地区へ、畳と薪を積み上げた大車に乗り衆人環視の中で引越す姿は都落ちの光景と呼ぶにふさわしいものである。

一方で、武田は、日中戦争、アジア・太平洋戦争の「敗者」が日本人のみでないことについても自覚的であった。〈上海もの〉のいくつかの作品は、日本人のみならず、親日派の中国人も敗戦後に住居を追われたことを示唆しているが、それらの作品の検討から両者の差異があまり出された。

日本人は敗戦により住居を追われ財産も奪われたものの、集中地区には居場所があり、時期が来れば帰国することができた。武田の〈上海もの〉の一つである「蝮のすゑ」(『進路』一九四七年八一〇月号)の末尾には、引き揚げ船が鹿児島湾に近づいていく場面が描かれるが、帰国を目前にした乗客たちは「おさななじみのあの山、あの河」と合唱し、帰郷の喜びをかみしめる。

つまり、多くの日本人にとって住居を奪われることは国を奪われることを意味しなかった。そればかりか「F花園十九号」では、日本人にとって占領地を離れることが、戦争責任から逃避する意味を持つことも示唆されていた。武田は「滅亡について」において、敗戦による日本人の「滅亡」体験について、「世界」の眼から見れば、日本のごく部分的な滅亡、したがってそれをまぬがれた残余の生存は、たとえば消化しきれないで残っている、筋の多い不愉快な食物にあたる物かもしれないのである(『全集』一二巻、九四頁)と論じたが、清算されずに終わった日本の戦争責任を、「滅亡」が部分的であったがゆえの「消化しきれない残余」と見ることもできるだ

ろう。

他方の親日派の中国人は、終戦後、勝者となった国家の中で漢奸即ち裏切り者として居場所を失った。漢奸としての裁きを逃れるために祖国を捨てて亡命する者もいた。漢奸となった中国人にとつて、住居を奪われることは国を奪われること、さらには命を奪われることにも連続していた。

付記 武田泰淳の著作からの引用は、『武田泰淳全集』（増補版、全一八巻・別巻二巻、筑摩書房、一九七八年）によった。『武田泰淳全集』は『全集』と略記した。

*1 「中日」文化協会」に関する初歩的な考察——上海分会を中心に『植民地文化研究』第四号、二〇〇五年七月、二二九—二三〇頁。現在、この邸宅は衡山馬勒別墅飯店 (Henshan Moller Villa) という名称のホテルとして使用されている。なお、武田はこの邸宅の所有者をノルウエーの大汽船会社の社長であったと述べている（「ぼくと上海」『日本読書新聞』一九五七年四月一五日号）。他方で、木内誠編著『上海歴史ガイドマップ 増補改訂版』（大修館書店、二〇一一年）では、邸宅の所有者であった「エリック・モラー (Eric Moller)」を「スウェーデン人の海運王」としている（九三頁）。

*2 住宅の接収は、占領下において普遍的に見られる現象である。連合軍の占領下におかれた日本でも、ホテル、軍事施設、学校などと並んで個人の住宅も接収対象となった。判明してい

るだけで、都内で一〇〇〇戸弱の住宅が接収されたという。佐藤洋一『図説占領下の東京』河出書房新社、二〇〇六年。

*3 木田隆文は、『中国の支那』と『西国の支那』のはざま——武田泰淳『月光都市』にみる上海と建築（日高佳紀、西川貴子編『建築の近代文学誌——外地と内地の西洋表象』勉誠出版、二〇一八年）において、『泰淳の創作方法の一つに、建築描写を通じてその都市の空間的特徴を読み／描き出す試みがあったことがうかがえる』（一〇八頁）と論じているが、本稿が対象とした作品にも同様の観点を確認することができ

*4 以下は、高綱博文『「国際都市」上海のなかの日本人』研文出版、二〇〇九年の第一章による。

*5 以下は、前掲高綱『「国際都市」上海のなかの日本人』の第四章および高綱博文『日本占領下における「国際都市」上海——日本の上海外国人政策と外国人居留民状況』（高綱博文編『戦時上海——一九三七—四五五年』研文出版、二〇〇五年）による。

*6 一九四三年四月時点における収容者数は、イギリス人五、四一八名、アメリカ人一、〇八一名、オランダ人一四八名、ベルギー人四七名、ギリシャ人一四名、総計六、七〇八名であった（前掲高綱『日本占領下における「国際都市」上海』、四六頁）。なお、フランス租界のアムステルダム沿いの邸宅で生まれ育ったイギリス人のSF作家、J・G・バラードも、一九四三年三月になってから家族と共に収容所に入れられた

という。バラード邸は一時的に傀儡政府軍の中国人將軍に占拠されていたようだ。『人生の奇跡——J・G・バラード自伝』柳下毅一郎訳、東京創元社、二〇一〇年。

*7 以下は、前掲高綱『「国際都市」上海のなかの日本人』の第七章による。

*8 堀田善衛・開高健「対談 上海時代」紅野謙介編『堀田善衛上海日記——滬上天下一九四五』集英社、二〇〇八年、四〇二頁。

*9 高綱博文は接収にまつわる手続きとして、「日本人居留民は「集中区」への移転に伴い、「集中区」外の日本人所有の動産（在庫商品、家具類等）及び不動産（土地及び住宅、事業場、工場等）を「残留動産不動産屈」を日僑自治会に提出させられた。また「集中区」の居留民に対しても無通告の接収を予想して予め「財産調書」を作成準備しておくことが求められた」と述べている。前掲『「国際都市」上海のなかの日本人』、二九六頁。

*10 前掲『わが文学、わが昭和史』、一四六頁。

*11 「O博士」のモデルである小竹文夫の住居は、アマースト路沿いの「中国人や外人の大実業家や要人の多い高級住宅区」にあった（「上海にいた作家たち」『群像』一九五六年六月号）。先述の「上海にいた作家たち」によれば、小竹の住居は「キャンブに行った」アメリカ人から接収した物件であった。

*13 川西政明『武田泰淳伝』（講談社、二〇〇五年）に収録されている「武田泰淳年譜」参照。

*14 本稿で取り上げる長編「F花園十九号」は、「F花園十九」（『文学界』一九五〇年九月号）、「賭のうちそと」（同、一九五〇年二月号）、「妄想くらべ」（同、一九五一年三月号）、「脱走」（『人間』一九五一年六月号）の連作四編を一つの作品としてまとめたものであり、初収は『武田泰淳全集』第三卷（筑摩書房、一九七一年）である（本稿では増補版を用いる）。

*15 武田は、前掲『対話 私はいま中国を語らない』においても終戦後の日本人に対する中国人の寛大さを強調している。同時に、武田は敗戦の時点で中国の内戦が継続していたことを示唆しつつ、当時の中国人が「身のふり方」を決めかねていたことも指摘している（五〇―五三頁）。

*16 王俊文は謝の「屍」をめぐるモチーフに、「中国人の中に罪人（漢奸）を生み出した罪の意識」を見て取っている。「善人」「悪人」及びその間——武田泰淳と敗戦前後の上海』『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』一一号、二〇一二年二月号、一四一頁。

*17 前掲高綱『「国際都市」上海のなかの日本人』、三章。

*18 天野知幸は、武田の〈上海もの〉の一つである「聖女俠女」を、引き揚げる日本人男性に対する批判の視点を内在させた、「帰れない／帰らない」女性を描いた作品として読み解いている。「マリヤはマリヤひとりの死を死ぬ——武田泰淳「聖女俠女」と戦後の上海」『金沢大学国語国文』三四号、二〇〇九年三月。

*19 前掲『座談会 わが文学、わが昭和史』にも、この女性につ

いての言及がある（一一八頁）。

* 20 大橋毅彦ほか編著『上海一九四四—一九四五——武田泰淳

『上海の螢』注釈』双文社出版、二〇〇八年、一七一—一七二頁。

* 21 『堀田善衛全集』第一巻、筑摩書房、一九九三年、三七六頁。

* 22 陶晶孫については、鈴木将久「対日文化協力者」の声——

陶晶孫を中心として」（前掲高綱編『戦時上海——一九三七—四五年』）を参照。

（みずたまり まゆみ・北海道大学教員）